様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８４９８

研究課題名（和文）国木田独歩の報道表現に関するジャンル横断的な研究

研究課題名（英文）Cross-genre Study of Kunikida Doppo's Expressions of News Reporting

研究代表者
前島　志保（MAESHIMA, Shiho）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：１０５３５１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本における報道の表現が大きく変化した世紀転換期に記者・編集者として活躍した国木田独歩が現実の報道のためにいかなる文章表現・視覚表現を試みていたのかを明らかにし、以て日本における近代的な報道表現の成立過程とジャーナリズム史におけるその意義の一端を解明することを試みたものである。研究成果は、各種学会・研究会で口頭発表したほか、『EAAブックレット』（東京大学出版会）、『ヒューマニティーズセンターブックレット』（東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター）、『デジタル復刻版『近事画報』（解説、記事・画像一覧付き）』（文生書院）などの形での出版・公開が予定されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、従来作家としての活動が注目される一方で見過ごされがちだった国木田独歩のジャーナリストとしての側面に注目した点、また、報道表現の史的研究を試みた点で、意義のある取り組みであったと言える。特に、独歩が編集長として尽力した『近事画報』の基礎研究を行い、デジタル復刻版の刊行に結び付け、様々な分野における今後の研究の発展に繋げることができたのは、大きな成果であった。この基礎研究を通して、画報誌再考の必要性という、今後の研究につながる気付きも得た。また、報道の表現（「形式」）に注目することで、これまでは言説や表象（「内容」）に焦点が当てられがちだった報道研究にも、一石を投じることができた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on novelist KUNIKIDA Doppo's career as a journalist and editor, this research project aimed to investigate what sorts of verbal and visual expressions he experimented in order to report the “reality” around the turn of the 19th and 20th centuries when modes of reporting greatly changed. By doing so, this research also attempted to shed light on the process of the formation of modern press representation and its significance in the history of modern Japanese journalism. The research results were presented at various conferences and workshops and will be made public in the form of book publications including four EAA Booklets (University of Tokyo Press), an HMC Booklet (University of Tokyo Press), and digital reproductions with commentaries as well as a list of articles and images of Kinji gaho; (Bunseishoin), a graphic magazine edited by KUNIKIDA Tetsuo (Doppo) as the editor-in-chief.

研究分野：文学、言語学およびその関連分野（比較出版史、比較メディア史、比較文学・比較文化）

キーワード：出版史　メディア史　報道　絵画　写真　近事画報　国木田独歩　リアリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

研究代表者は、大正期から昭和初期にかけての出版・読書文化の大衆化に関する研究を通して、その中心となっていた婦人雑誌をはじめとする大衆的な雑誌において、報道的なコンテンツが非常に発達していたことを明らかにした。その淵源をたどっていくなかで、このような報道表現への傾きは明治末期の原文一致の確立と写真表現の定期刊行物の導入に端を発しているらしいことも判明した。この報道表現の転換期に現実の描写に大いに関心を持っていたのが、国木田独歩である。

独歩は新聞記者として報道記事を数多く著すとともに、先駆的な報道画報誌『近事画報』の編集長を務めた人物だが、これまでの研究では自然主義作家としての側面のみが注目されてきたきらいがある。彼のジャーナリストとしての側面は黒岩比佐子『編集者 国木田独歩』（2007 年）でようやく光が当てられたばかりで、彼の著した報道的な記事あるいは編集にあたった出版物の表現の特徴について丁寧に分析した論考は無い。木村洋が「平民主義の興隆と文学」（『文学熱の時代』2015 年）で指摘したように、独歩は同時代の現実を記録することに並々ならぬ関心を持って取り組み短編の執筆を行ったが、彼の現実の観察・記録への関心はその報道的な文章や雑誌出版にこそあらわれているはずである。

独歩が探求した報道表現について考察することは、近代日本における報道表現の形成を解明にもつながるとの考えから、本研究を開始することとした。

## ２．研究の目的

本研究は、日本において新聞・雑誌における報道が盛んになり、報道表現が大きく変化しつつあった明治後期（世紀転換期）に記者・編集者として活躍した国木田独歩（哲夫）が現実の報道のためにいかなる文章表現・視覚表現を試みていたのかを明らかにし、以て日本における近代的な報道表現の成立過程とジャーナリズム史におけるその意義を解明することを試みたものである。

これまでの国木田独歩に関する研究では、主に彼の作家としての側面のみに焦点が当てられてきた。しかし、独歩は長きにわたり記者あるいは編集者として報道表現にかかわったジャーナリストでもあった。また、彼がジャーナリストとして活躍した時代は、口語体および挿絵や写真画像の導入により、日本における報道表現が大きく変化した時期だった。本研究では、独歩の報道的な記事の表現を分析し、彼がどのように現実を伝えようとしていたのかを明らかにすることを目的とした。あわせて、独歩が編集長を務めた『近事画報』（※１）を含む、明治期における時事的な画報誌の特質の一端の解明にも努めた。

具体的な目標としては、以下を念頭に置いて研究を進めた。

（１）独歩の『国民新聞』『報知新聞』『民声新報』記者として著した記事を、当時の他の報道的な文章と対比しつつ分析し、彼の文章における報道表現の特徴を明らかにすること。

（２）独歩の編集した雑誌群のうち、先駆的な報道的画報誌『近事画報』(*)に焦点をあて、編集者としてどのような文章と視覚表現（絵、写真）で現実の報道を行おうと試みていたのかを解明すること。

現在、『近事画報』は図書館・資料館で原本の入手・利用が困難となっている（※２）。よって、研究目標（２）を達成するには、同誌の資料調査とデータの整理が必要となる。ここから、第三の目標として、以下を設定した。

（３）『近事画報』のデジタルカラー復刻版刊行を目指した基礎研究（資料調査・データ整理）を行うこと。

※１：1903 年 3 月『東洋画報』として創刊、同年 9 月『近事画報』に改題、1904 年 2 月—1905 年 10 月『戦時画報』と改題、1905 年 10 月—1907 年 2 月『近事画報』に復題。ここでは、断りの無い限りは全てを『近事画報』と呼ぶこととする。

※２：現在、原本は複数の図書館・資料館に分散した形で所蔵されている。また、複製ではマイクロフィッシュ版および国会図書館のデジタル版が存在するが、いずれもモノクロ

で欠号もある。したがって、色鮮やかな表紙と口絵で読者をひきつけていた『近事画報』の表現を分析するには、原版のカラーデータの整理が急務となる。

## ３．研究の方法

上の目標を達成するため、以下のような作業を行った。

・１（目標（１）に対応）： 1894 年から 1901 年（明治 27—34 年）までの間に独歩が記者として『国民新聞』『報知新聞』『民声新聞』に発表した報道的文章の表現上の特色を、同時代の代表的な報道的な文章と対比しつつ、考察する。この時期の独歩の報道的文章の代表作は、日清戦争時に『国民新聞』に連載され後に単行本として民生社から刊行された『愛弟通信』であるが、記者として著したそれ以外の文章も考察対象に入れる。

・２（目標（３）に対応）：東京大学大学院 法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター（以下、明治新聞雑誌文庫）、日本近代文学館、東京藝術大学図書館、慶應義塾大学図書館、関西学院大学図書館などで『近事画報』の原本を確認・撮影し、データとして整理する。RA の協力のもとに落丁などを確認し、目次情報の入力などを行う。

・３（目標（２）に対応）：２をもとに、『近事画報』の文章テクスト、視覚表象テクスト、および編集傾向の分析を行う。分析にあたっては、『風俗画報』（東陽堂、1889—1916 年）、『写真画報』（博文館、1904-1907 年。戦時中は『日露戦争実記』『日露戦争写真画報』）、『帝国画報』（冨山房、1904—1905 年。戦時中は『日露戦報』『軍国画報』）など、当時出ていた他の画報雑誌の例とも対比しながら考察するように心がける。

当初は１、２、３の順に資料調査と分析を行っていくことを予定していたが、『近事画報』の多くを所蔵している明治新聞雑誌文庫が改装工事のために 2020 年 1 月から 2021 年夏まで閉館となったこと、また、2020 年 3 月以降、コロナ禍で図書館・資料館を通常通り使用できない状況が続いたことにより、２・３を優先的に行うことにした。

また、本研究を遂行するにあたり、画報誌と明治期の出版状況に関する理解を深めるための非公開研究会（「画報誌研究会」）と、近代的ジャーナリズムの成立期に関する学際的・国際的な研究を行うための公開研究会（「ジャーナリズム研究会」）を設立、それぞれコロナ禍前は隔月、コロナ禍後は数か月に一度の割合で開催し、世紀転換期前後を中心とした出版・報道文化に関する知見を深めることに努めた。

## ４．研究成果

（１）『近事画報』カラーデジタル復刻版刊行（解説、挿絵・写真・記事一覧付き）

『近事画報』の基礎研究の成果は、文生書院の協力のもと、解説および挿絵・写真・記事一覧付きカラーデジタル復刻版出版に結実、2022 年度もしくは 2023 年度に刊行予定である。これは、これまで複数の図書館・資料館に分散されて不完全な形で所蔵され、また、複製版としてはモノクロのマイクロフィッシュ版しか存在していなかったために研究が困難だった『近事画報』の初めての完全カラー復刻版であり、文学、美術、出版史、メディア史、ジャーナリズム史、歴史社会学、歴史学など、様々な研究への貢献が期待される。

上の基礎研究を通して、『近事画報』の特質および明治期日本における「画報」という雑誌ジャンルの特異性も浮かび上がってきた。『近事画報』の特質の一端としては、継続的な刊行が行われていなかった明治期の時事的な視覚的定期刊行物のなかで、例外的に戦時期以外の時期も含め四年間にわたり出版され続けたという点が挙げられる。公開研究会の活動（下記）を通じ、明治期日本の画報誌は、日本における後のグラフ誌とも、また、欧米における絵入新聞・絵入雑誌とも異なる特性を持った定期刊行物として、再考する必要があることも判明した。

『近事画報』の特性、および、同誌において国木田独歩（哲夫）編集長のもと現実を報道するために文章上・視覚表現上いかなる工夫が行われていたのかという点については、国内外の以下の場で口頭発表、および活字化した（一部は 2022 年度に発表もしくは刊行予定）。

**（２） 口頭発表**

- **前島志保「明治期における画報誌と『近事画報』（仮）」東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター HMC オープンセミナー（2022 年 9 月 2 日発表予定）***
- **前島志保「「見る雑誌」の誕生――近代日本における雑誌写真の展開と『主婦之友』の写真表現」東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター 第 56 回 HMC オープンセミナー（2022 年 3 月 4 日）****
- **前島志保「座談会記事再考――明治末期から昭和初期の雑誌における談話体記事」メディア史研究会 2021 年 11 月例会（2021 年 11 月 21 日）****
- MAESHIMA, Shiho. "In Search of Lost Images and 'Cracks' in Mass Media: Representations of Self and Other in Interwar Japanese Magazine Photo Reportage." Japan: Premodern, Modern, Contemporary" Conference (2021 **年** 9 **月** 4 **日**)**
- MAESHIMA, Shiho. "Shifting Realities in Japanese Journalism at the Turn of the Century: Focusing on Pictorial Magazines around the Russo-Japanese War." 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS)（2021 **年** 8 **月** 26 **日**）（**東京外国語大学の巽由樹子氏をディスカッサントとし、東京大学のイリナ・ホルカ氏、九州大学の松枝佳奈氏、**Oxford University/**国際日本文化研究センターの酒井悠氏とともにパネル**"War and the modern media: exploring Japanese popular magazines at the turn of the 20th century"**を組織し、研究発表）***
- **前島志保**「座談会というスキャンダル――談話的公共圏の成立」第五回ジャーナリズム研究会（2021 年 3 月 14 日）****
- MAESHIMA, Shiho. "The Empire's Divided World Picture: Discourses and Representations of "Self" and "Other" in Interwar Japanese Magazines." TINDAS (Integrated Area Studies on South Asia at the University of Tokyo) International Workshop: Knowledge on the Move. (2021 **年** 1 **月** 9 **日**)**

**（*は、主として本研究の成果。**は一部に本研究の内容を含むもの。以下同じ）**

**（３） 雑誌論文**

- MAESHIMA, Shiho. "In Search of Cracks and Lost Voices in Mass Media: Representations of the 'and 'Other' in Photo Self' Reports in Late Interwar Japanese Magazines." *The International Quarterly for Asian Studies*. Vol. 53. 2022.**
- **前島志保「「婦人雑誌」の誕生と出版の大衆化」『比較文學研究』**105 **号（**2019 **年）****

**（４） 書籍**

- **前島志保** Humanities Center Booklet（2022 **年の** 1・2 **回分の発表に基づいたもの）（東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、**2022 **年）***
- **前島志保** EAA Booklet（**ジャーナリズム研究会第** 4, 5, 7 **回分の発表に基づいたもの。うち、前島は第** 5 **回分の発表を担当）（東京大学出版会、**2022 **年）****

**（５） 研究会**

**上記のような取り組みと並行して、近代の出版・報道文化の形成に関する学際的・国際的な研究を行うための公開研究会（ジャーナリズム研究会、東京大学東アジア藝文書院／**EAA **と共同開催）と非公開研究会（画報誌研究会）を以下のような形で行った。**

**＊ジャーナリズム研究会（公開）**

**合計** 7 **回開催（第一回、第二回は東京大学駒場Ｉキャンパスにて開催。第三回以降はリモート開催。司会は、第四回、第五回、第六回以外は前島志保）。**

- 第一回（2019 年 12 月 15 日）：岩月純一（東京大学）「近代ベトナムにおける新聞・雑誌の形成――文字言語の交代との関わりを中心に」、松枝佳奈（東京大学）「明治期知露派文人ジャーナリストのキャリア形成――二葉亭四迷・大庭柯公の場合」
- 第二回（2020 年 2 月 9 日）：武田悠希（立命館大学）「複合的メディアとしての画報誌の行方――押川春浪の雑誌編集の活動から」、岡安儀之（東北大学）「近代新聞の形成――福地源一郎とその周辺に注目して」
- 第三回（2020 年 7 月 26 日）：佐藤至子（東京大学）「絵は出来事をどう語るか――近世後期の草双紙における視覚表現」、河崎吉紀（同志社大学）「ジャーナリストと政治家の分岐」
- 第四回（2020 年 9 月 20 日）：梁蘊嫻（台湾・元智大学）「『絵本通俗三国志』の出版――明治期日本と清朝の出版状況の比較」、趙寛子（韓国・ソウル大学）「独立新聞の徐載弼――ナショナル・シンボルを創設し、ナショナル・ ヒストリーの外に立たされたジャーナリスト」、土屋礼子（早稲田大学）「近代日本のジャーナリズムにおける大衆化／民衆化」、前島志保（ディスカッサント）（東京大学）、イリナ・

ホルカ（ディスカッサント）（東京大学）、松枝佳奈（司会）（東京大学）

- 第五回（2021 年 3 月 14 日）：巽由樹子（東京外国語大学）「帝政期ロシアのジャーナリズム—媒体と担い手の特性について—」、前島志保（東京大学）「座談会というスキャンダル——談話的公共圏の成立」、高原智史（司会）（東京大学・院）
- 第六回（2021 年 8 月 14 日）シンポジウム「朝日**会館と**〈コドモ〉文**化**（1926-1935）——メディア、家庭、社会教育」：佐藤宗子（千葉大学名誉教授）「基調講演：昭和初年代の子どもたち——描かれた姿とその背景」、前島志保（東京大学）「メディア史から見た『アサヒカイカン・コドモの本』」、髙山花子（東京大学）「メディア史から見た『アサヒカイカン・コドモの本』」、大森雅子「メディア史から見た『アサヒカイカン・コドモの本』」、紙屋牧子（玉川大学）「朝日会館と「映画教育」——“少年映画”『二つの玉』（1926）をめぐって」、山本美紀（青山学院大学）（司会）「朝日会館と「映画教育」——“少年映画”『二つの玉』（1926）をめぐって」、畠山兆子（ディスカッサント）（梅花女子大学名誉教授）
- 第七回（2022 年 3 月 20 日）：陳萱（致理科技大学）「「台湾事件」における台湾像の形成—新聞メディアの表象をめぐって」、Amelia Bonea（ハイデルベルク大学）"Trans-imperial journalism and technologies of communication in nineteenth-century South and East Asia"

**＊画報誌研究会（非公開）**

**合計 12 回開催（第一～五回は東京大学駒場 I キャンパスにて開催。第六回以降はリモート開催）。うち、前島（研究代表者）の発表は、以下の通り。**

- 第四回（2019 年 10 月 2 日）：前島志保「英語圏のジャーナリズム史研究の動向——人文学との接点に焦点を当てて」*
- 第五回（2020 年 1 月 15 日）：前島志保「日本と欧米の画報誌・グラフ誌——報道媒体を中心に」*

**＊研究会研究成果（書籍）**

**ジャーナリズム研究会での研究報告は、以下の形で刊行する予定である（一部既刊）。**

- 『EAA Booklet EAA Forum 18 **朝日会館と〈コドモ〉文化**（1926-1935） **——メディア、家庭、社会教育**』**（ジャーナリズム研究会第** 6 **回分）（東京大学出版会、**2022 **年）****
- 『EAA Booklet **朝日会館と〈コドモ〉文化**（1926-1935） **——メディア、家庭、社会教育　２**』**（東京大学出版会、**2022 **年）（ジャーナリズム研究会第** 6 **回分）（東京大学出版会、**2022 **年刊行予定）****
- 『EAA Booklet』**（ジャーナリズム研究会第** 1－3 **回分）（東京大学出版会、**2022 **年刊行予定）****
- 『EAA Booklet』**（ジャーナリズム研究会第** 4, 5, 7 **回分）（東京大学出版会、**2022 **年刊行予定）****

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>MAESHIMA Shiho | ４．巻<br>53 |
| ２．論文標題<br>In Search of Cracks and Lost Voices in Mass Media: Representations of the “Self” and “Other” in Photo Reports in Late Interwar Japanese Magazines | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>the International Quarterly for Asian Studies | ６．最初と最後の頁<br>未定 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保 | ４．巻<br>105 |
| ２．論文標題<br>「婦人雑誌」の誕生と出版の大衆化 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>比較文學研究 | ６．最初と最後の頁<br>27－48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計33件（うち招待講演　18件／うち国際学会　18件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>前島志保 |
| ２．発表標題<br>明治期における画報誌と『近事画報』（仮） |
| ３．学会等名<br>東京大学連携研究機構 ヒューマニティーズセンター HMCオープンセミナー（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>前島志保 |
| ２．発表標題<br>「見る雑誌」の誕生――近代日本における雑誌写真の展開と『主婦之友』の写真表現 |
| ３．学会等名<br>東京大学 ヒューマニティーズセンター 第56回HMCオープンセミナー（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>前島志保 |
| ２．発表標題<br>座談会記事再考 ――明治末期から昭和初期の雑誌における談話体記事 |
| ３．学会等名<br>メディア史研究会2021年11月例会（リモート開催） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>MAESHIMA Shiho |
| ２．発表標題<br>In Search of Lost Images and “Cracks” in Mass Media: Representations of Self and Other in Interwar Japanese Magazine Photo Reportages |
| ３．学会等名<br>“Japan: Premodern, Modern, Contemporary” Conference (Dimitrie Cantemir Christian University, Bucharest, リモート開催)（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>MAESHIMA Shiho |
| ２．発表標題<br>Shifting Realisms in Japanese Journalism at the Turn of the Century: Focusing on Pictorial Magazines around the Russo-Japanese War |
| ３．学会等名<br>16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>前島志保 |
| ２．発表標題<br>メディア史から見た『アサヒカイカン コドモの本』 |
| ３．学会等名<br>東京大学東アジア藝文書院/EAA リサーチユニット 第六回ジャーナリズム研究会、朝日会館子供企画研究会シンポジウム「朝日会館とコドモ文化（1926-1935）――メディア、家庭、社会教育」 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>MAESHIMA, Shiho |
| ２．発表標題<br>The Empire’s Divided World Picture: Discourses and Representations of “Self” and “Other” in Interwar Japanese Magazines. |
| ３．学会等名<br>TINDAS (Integrated Area Studies on South Asia at The University of Tokyo) International Workshop: Knowledge on the Move: Connectivities, Frontiers, Translations in Asia.（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>前島志保 |
| ２．発表標題<br>座談会というスキャンダル――談話的公共圏の成立 |
| ３．学会等名<br>第５回ジャーナリズム研究会（東京大学 EAA/東アジア藝文書院） |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計15件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター | ５．総ページ数<br>未定 |
| ３．書名<br>Humanities Center Booklet | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保（編著） | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>東京大学出版会 | ５．総ページ数<br>未定 |
| ３．書名<br>EAA Booklet（ジャーナリズム研究会第4，5，7回分） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>東京大学出版会 | ５．総ページ数<br>未定 |
| ３．書名<br>EAA Booklet　EAA Forum 18　朝日会館と〈コドモ〉文化（1926-1935）　――メディア、家庭、社会教育２（ジャーナリズム研究会第6回分残り） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保（編著） | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>東京大学出版会 | ５．総ページ数<br>未定 |
| ３．書名<br>EAA Booklet（ジャーナリズム研究会第1－3回分） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>前島志保 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>東京大学出版会 | ５．総ページ数<br>118 |
| ３．書名<br>EAA Booklet　EAA Forum 18　朝日会館と〈コドモ〉文化（1926-1935）　――メディア、家庭、社会教育 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京大学東アジア藝文書院（EAA)サイト内「ジャーナリズム研究会」関連ページ一覧
https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/?s=%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%83%AA%E3%82%BA%E3%83%A0%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A

東京大学ヒューマニティーズセンター　第56回HMCオープンセミナー
https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2022/56-visual-magazine-shufunotomo/

朝日会館・会館芸術研究会（東京大学内のサイト　研究会の活動を順次掲載）
http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/kaikan/

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | ボネア　アメリア<br><br>(Bonea Amelia) | ハイデルベルク大学（ドイツ）・Heidelberg Centre for Transcultural Studies (HCTS)・research fellow | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

| | |
|---|---|
| 国際研究集会<br>第４回ジャーナリズム研究会 国際ワークショップ | 開催年<br>2020年～2020年 |
| 国際研究集会<br>第７回ジャーナリズム研究会 公開研究会 | 開催年<br>2022年～2022年 |

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 韓国 | ソウル大学 | | | |
| その他の国・地域（台湾） | 元智大学 | 致理科技大学 | | |
| 日本 | 九州大学 | 東京外国語大学 | 早稲田大学 | |
| 英国 | Oxford University | | | |
| ドイツ | University of Heidelberg | | | |